

# モノとヒトとを組み直す

## —B. Latour の「コスモポリティクス」論について—

早稲田大学  
栗原 亘

「社会」は、人間同士の諸関係はもちろんのこと、人間と人間以外のモノ（人工物から動植物にいたる諸々）、すなわち非人間（nonhuman）との諸関係無しにも成り立たない。この人間と非人間との関係という論点は、特に 20 世紀後半頃から、多種多様な領域において盛んに主題化されてきた。それは主に人間および人間集団に焦点を合わせてきた人文・社会科学の領域においても例外ではなく、様々なアプローチが確立・提唱されてきた。近年では、R. Grusin らのように、「非人間的転回（nonhuman turn）」なるものを主張するものも現れている。

本報告が取り上げるアクター・ネットワーク理論（actor-network-theory；以下、ANT と略記）もまた、人間と非人間との関係を主題化することを目指す方法論的立場の 1 つである。ANT は、人間と非人間との関係を扱う諸議論の中でも、「脱・人間中心のアプローチ（non-anthropocentric approach）」と呼ばれる立場に属する。「脱・人間中心のアプローチ」とは、主に以下のような特徴を共有する、分野も方法も多種多様な試みを指すものである。すなわち、①人間だけではなく非人間にも行為者性（agency）を認めるべきとし、②人間中心の観点（非人間は人間からの働きかけに対して受動的な位置しか占めないと考えるような議論）と非人間中心の観点（いわゆる技術ないし環境決定論など）の双方を回避し、③さらに、人文・社会科学の知見と自然科学の知見とを単に折衷するような方法もとらないようなものである。ANT は、こうした「脱・人間中心のアプローチ」の先駆けであるとされ、それについて（肯定的にであれ、否定的にであれ）言及する議論のほとんどにおいて引き合いに出される。

しかし、頻繁に言及される一方で、ANT に関する理解が進んでいるかといえば、必ずしもそうではない。まともに評価する必要すらないとする批判者も多い上に、さらに、同じ「脱・人間中心のアプローチ」を試みているはずの論者たちからさえも、手放しで称賛されることは稀である。本報告では、こうした状況を踏まえた上で、ANT の射程と意義について改めて整理する。

そうするにあたり、本報告が特に焦点を合わせるのは、ANT の主唱者の 1 人である B. Latour の議論である。Latour は、ANT の方法論としての確立およびそれをを用いた事例研究の蓄積に従事してきた。すなわち、人間と非人間との関係の在り方を記述する方途の探求とその実践をおこなってきた。しかし、他方で彼は、人間と非人間との関係を記述することにだけ専念するのではなく、それを積極的に構成（compose）する方途についても論じている。それは、人間と非人間とが織りなすネットワークの存在を踏まえた、適切な「政治」の在り方はどのようなものであるかという問いである。Latour は、自らの考える「政治」の在り方を I. Stengers に倣い「コスモポリティクス」と呼ぶ。この「コスモポリティクス」の議論は、科学と政治ないし環境と政治といった、特に 2000 年代以降、H. Collins らによる「科学論の第三の波」に関する提言をはじめ、改めて盛んに論じられるようになってきている古典的なテーマに深くかかわるものでもある。

以上のような Latour の思索における 2 つの流れは、明らかに相互に関係し合っているといえる。しかし、にもかかわらず（Latour 自身によってさえ）体系的に論じられてきたとは言い難い。本報告は、まさにこの Latour の思索における 2 つの流れの間の関係を検討する作業を通して、上述した ANT の射程とそれが今日持つ意義について提示していくこととする。